

大学を溶かすこと

—国際主義を考えて—

同志社大学神学部4年 浅尾雅俊

はじめに

2011年3月11日の地震と津波は東北地方に消えることのない爪痕を残し、放射能は日本だけでなく地球全体を未だに汚染し続けている。この出来事を境に世界は変わったのだ。しかし私はそれ以上に、世界を変えなければならないと思う。つまり私にとって3・11は、歴史に残る自然災害が起きた日付ではなく、原発事故を発端に明らかになった日本人全体の正義・倫理の欠如を目の当たりにし、この日本の状況を「変えなければならない」と促す言葉なのである。人命より利益を求める国や企業、無数の御用学者と言われる人々を生み出してきた学問の世界、自分たちは騙されてきたと自らの責任を棚に上げ、政府と電力会社ばかりを非難する国民など、日本社会全体の正義・倫理の欠如が明らかになった。自然災害は人知の及ばないところで繰り返され、被害は物理的に限られた範囲内でしか起こらない。しかし正義・倫理は、誰一人として無関係ではあり得ない全人類の問題である。「～なければならない」という時にのみ、それはユニヴァーサルな問題となるのだから、3・11は私たちに正義・倫理の欠如という課題を突き付けるものでなければならない。このエッセイで私は、3・11の問題を大学という場所で引き受けたい。なぜなら、大学が正義・倫理を民衆に伝えるという役割を十分に果たせていないという根本的な問題があるからであり、特に御用学者を生み出してきた責任は大きいからだ。私は、大学のありべき姿、そしてそこから正義・倫理のあり方について意見を述べることによって、大学を単なる施設や組織から普遍的な意味を持つものにしてゆこうと思う。

大学の三つの条件

大学には次の三つの条件がなければいけない。一つの全体として真理を目指していること、国際主義であること、そして真理と国際主義を伝えていることである。これらの条件は一つでも倒れると全てが倒れるものであり、互いに密接に関わっている。まず、大学が

一つの全体として真理を目指しているとは、大学が真理を保持しているということではない。一つの知の部門 (Branch of knowledge) は限りある範囲で固有の方法を用いて一定の方向から真理を目指しているかぎり、大学はすべての部門の総体としてのみ一つの真理を目指すことができることを意味している。そのために大学は真理を追究する科学 (Science) であれば、すべて受け入れなければならない。特定の部門や科目を排除したとき、大学はすべての機能を失ってしまう。もちろん、神学、法学、医学、物理学、哲学、文学・・・など無限にある部門を一つ残らず設置はできない。例えば日本では、神学部を設置している大学が少ないが、設置していないこと自体は問題ではない。その時たまたまその大学で神学を追究している学生がいなくただけである。ただし、神学部が設置されない結果、神学の追究ができなくなる、神学が軽んじられる、忘れられる、あるいは神学の分野が他の部門によって横取りされ損なわれるとき、大学はその全体性を失い真理の追求を断念してしまう。これはどの分野に関しても当てはまる。それぞれの部門が真理追求に関して固有の道を持っているかぎり、真理を目指す大学において、どの一つの道も損なわれてはならない。ましてや、ある部門が自らの領域を越えて他の部門を占有してその正当性を主張する時、それはその一つの固有の道が失われることであり、真理追求の妨げとなる。大学は全ての部門が忘れ去られないよう常に警戒し、どのような部門でも受け入れる用意、つまり潜在的には全ての部門を設置していなければならない。大学は、全ての部門を総合的に保ってこそ、真理を目指す可能性を持つのである。

このようにすべての真理追究の道を保持すべき大学にとって、国際主義は必須の条件である。この言葉がいつも曖昧に使われるのは、それが理念だからだ。ここで私は国際主義を、無制限の受け入れと理解したい。大学が国際主義であるのは、真理を追求するために出来るかぎりの科学を受け入れ、潜在的に設置されている部門に対する意識を繰り返し喚起するためである。他の分野に対する意識の欠如は、ある一定の限られた分野だけが真理追究の手段であると勘違いし、他の部門が扱うべき分野を不当にも取り扱ってしまう危険がある。例えば、ある心理学者が「人間のすべての感情は脳内の科学物質の分泌によって決まるので、感情は心理学だけが取り扱うべきである」と言ったとすると、彼は確実に「井の中の蛙」である。なぜなら、他の分野も扱うべき問題を心理学が独占すべきと思い込ん

でいるからである。大学は「蛙」になる危険性をいつも孕んでおり、それを避けるために国際主義なのであり、新しい世界との接触を通じて自己批判的な存在であり続けようとするのである。このような意味で、大学の国際主義はなんらかのアドヴァンテージではなく、国際主義でなければ大学ではないのである。簡単にいえば、国際相互理解や学生の異文化交流などは国際主義の理念が具体的な形を取ったものであり、目的ではなく手段である。

このように国際主義は真理の追求を前提としており、真理の追求に国際主義は必須である。大学が、ある部門を忘れ去ることによって真理追求を断念する危険性を持っているのと同じように、例えば、唯一且つ人類に普遍の真理を抜きにしたグローバリゼーションやインターナショナリズムは、単なる世界侵略や帝国主義に陥る。私が真理を重要視するのは、全人類を一つのまとまりとして考えるためには、唯一且つ人類に普遍の真理が必要だからだ。真理のように「偏在することがない」という特徴を持っているものは他にはない。また、国際主義が無制限の受け入れを意味するのであれば、それは大学だけでなく国家と国家、文化と文化、個人と個人の間、あるいは国家と個人や国家と文化といったすべての関係に普遍的に適用されなければならない。この「されなければならない」というのは、大学が真理を目指しているからこそ一つの部門も損なわれてはいけないように、人類が真理を目指しているからこそ何人も損なわれてはいけないという確信の上に成り立っている。

三つ目の条件は、上のような真理の重要性や国際主義のアイデアを伝えることが大学の使命であることを表している。これは、大学が真理を保持しているとか、国際主義が十分に実践されている場所であるということでは決してない。ましてやその逆である。大学は、学問による真理追求と国際主義の試みを通して、常に真理の獲得に失敗し続け、国際主義を十分に果たせずにいる状況を提示し続け「なければいけない。」このような大学の在り方は、大学は真理でないもの（＝偽り）を真理としてはいけないと万人に述べ伝えることを目的としている。大学は常に偽りを真理とすることで墮落する可能性を持つ。簡単に言えば、大学の絶え間ない試行錯誤を単なる失敗の連続と勘違いし、真理の獲得は不可能と考えて真理追求を無駄なものだと結論付けること、つまり「現実を見よ！」と言って大学の今ある状況（＝現実）を真理としてしまい、真理追求を断念してしまう可能性を常に持っているということだ。そのような罠に引っかからないために、大学は真理を追求し続け、

その必要性を伝えるという使命感を持たなければならないのだ。これまで述べた大学の三つの条件とその理念を述べ伝え、全人類が真実を目指すように促さ「なければいけない。」これは真理の追求をしている者が普遍的に持たなければならない正義・倫理の基礎である。

理想と現実の対立

これまで大学のあるべき姿を提示してきた。これは大学（特にミッション系の大学）にとっては当たり前のアイデアであり、わざわざ取り上げる必要はない、あるいはこのようなアイデアは大学の基礎部分で静かに保たれるべきものであって、大手を振るって主張されるべきものではないと感じられるかもしれない。しかし、私はこの当たり前のことが言われなくなっていることに危機感を覚えている。例えば、このエッセイのテーマでもある「国際交流」が最初は私が提示したような理念に基づいて実行されていたとしても、次第にその内実を失い「個人の視野を広げるため」といった空虚なものになってしまうこともある。それは、国際交流そのものが目的となってしまう、そもそもの理念を忘れてしまった結果である。このような結果を避けるためには、それらをもっと大きな文脈、つまりここでは真理の追求の中に位置づける必要がある。しかし、まだ最も厄介な問題には取り組んでいない。それは、ここで言われている国際主義や大学の役割は単なる理想であって、現実的ではないという反論である。

このような反論は「理想と現実」「理論と実践」「大学と社会」がそれぞれ対立・分裂しているという前提の下に行われる。しかし、世界をそのような対立軸で考えること自体が正義・倫理の欠如の結果であり、真理の追求を断念してしまっている。3・11以降の原発問題においても、この理想と現実の対立が見られる。根拠や議論の種類は様々であっても大概は「国益のために、子供にどれほどの犠牲を強いるのか？」という論争にたどり着く。この議論が根本的に正義・倫理に欠けるのは、子供は守るべきであるという正義・倫理が、国防、国益の必要性によって制限されているからである。私は真理追求のためには無制限の受け入れをしなければいけないと主張した。これは文字通り、自らの保身を省みず他を受け入れることを表す。もう少し極端に言えば、保全是国際主義の妨害になるという事である。つまり、日本国を守るための経済発展や安全保障といった国家の保身は正義・倫理ではないのである。3・11以降、国家、企業、メディア、われわれ民衆の多く

がこの「ちょっと物知り風の議論」に無批判に参加したのである。これは「子供を守ること」を理想に、「日本国の維持」を現実に見据えてしまい、「現実を見よ！」という態度で現実を絶対視してしまった結果である。子供を守ることが正義・倫理であるのなら、それは実行しなければいけないことであり、それを妨げるものはないはずである。理想、理論、大学を机上の空論として、現実、実践、社会に対立するものとするのは、正義・倫理の実践を拒むこと、つまり真理追求を断念することである。

記述と規範の可能性

私は、上の問題において国の保全は正義・倫理に反すると述べた。しかし、国際主義を個人の間にも適用されるべき普遍的な倫理と考える私の立場からすれば、国家という枠組みを温存してしまっているインターナショナルという言葉は問題を孕んだものである。インターナショナルという言葉は、大学の理念、つまり正義・倫理が具体的な形を取ったものを表すために用いられる記述的な言葉である。しかしその言葉が単独で提示されるとき、国家という枠組みを保たなければならないという規範的な意味を持つ。インターナショナリズムがナショナリズムを誘発するというのはこのような事情からである。国際主義が国という枠組みを越えられない理由は、すべて受け入れなければならないという「理想」と今世界には複数の国家が存在するという「現実」の対立が前提とされた結果、理想は忘れ去られ、現実だけが強調されてしまったからである。しかし私があくまでも国際主義という言葉を使い続けるのは、どのような記述であっても規範的な機能を持つかぎりには、インターナショナルに変わる言葉—たとえばトランスナショナルといった代替概念—を示すよりも、戦略的にその意味をずらしてゆく必要があると思うからである。これから私たちがインターナショナルという言葉を考えるとき、このような問題意識をもって批判的に取り組まなければならないはずである。これこそが理想と現実の対立・分裂を反省すること、つまり大学の役割である。

終わりに

私はこのエッセイで、三つのことを試みたつもりである。まず国際主義を大学の理念の中に位置づけることによって、それは表面的な国際交流を表すものではなく、確固たる理念に基づいていることを確認した。そして国際主義を無制限の受け入れと理解することで、

国家間だけではなく、それを人類に普遍的な課題として提示した。最後には、これから国際主義をどのように取り扱っていくべきかを論じた。国際色豊かなエッセイとはならなかったかもしれないが、国際主義を、「大学」「真理」「正義・倫理」「3・11」「理想と現実」「記述と規範」といった興味をそそる普遍的な問題と結び付けることができた点で、国際的色調の濃いものにはなったと思う。

私の問題意識はまず、私が今置かれている状況と国際主義を結びつけることだった。私は学生として大学とは何かということを考えているし、3・11の後、大学の在り方も問われなければならないかぎり、この問題に対して無関心なエッセイを書くことはできなかった。また、国際主義の意味がかなり矮小化されているにも関わらず、あまりにも当たり前に使われていることにも常々疑問を感じていた。それが国家レベルであれ個人レベルであれ、単に国際交流くらいの意味しか持たないとすれば、大学が国際主義を標榜するだろうか。形骸化された国際主義は、無用どころか弊害をもたらすものとなる。このような状況下で何を考えるべきか。それは国際主義を考え直すことだった。しかし、既に一人歩きしているインターナショナルという言葉を捕まえるためには、そのものだけを論じても意味がない。だからこそ、大学という文脈の中に位置づけることにした。もちろん私は一人の神学部の学生として一つの限られた方向から国際主義を考察したに過ぎないが、それこそが私の取り組むべきことだと確信している。ナショナルな枠組みを越えられない国際主義を批判することで新しい可能性を見出そうとしたこのエッセイは、単に理論を述べているのではなく、記述と規範の可能性を用いた私の国際主義の実践でもある。

大学が全体として真理追求しているように、個人もその人全体として真理を追求しなければならない。国際主義は全人類が一つの真理を目指すために必要なものであって、真理を目指しているかぎりそれは正義・倫理そのものである。もし誰かがマルクスを文字で「理想は人間の阿片である！」と言ったとすれば、「理想を阿片にしてはいけない！」と言わなければならない。理想と現実を引き離してはいけない。大学と社会を分けてはならない。真理の追求、正義・倫理は人間の中心であり、世界の中心になくしてはいけない。つまり大学が普遍的に人類の真ん中になくしてはならないのである。大学の使命そして人類の使命は、大学を溶かすこと。そして人々の中に浸透させることである。